
賞味期限切れに鎮魂歌（レクイエム）を

へのへのもれじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賞味期限切れに鎮魂歌を^{レクイエム}

【Nコード】

N1493U

【作者名】

へのへのもれじ

【あらすじ】

休日の土曜日、午前中にすべき用事をすべて片づけた大川常雄は、居間で朝刊を読んでいた。すると妻である良子が傍らにやってきて、常雄にある質問をしたのだが、そこから常雄の苦闘が始まった。

（前書き）

元々自分のブログに掲載していた超短編小説に加筆修正したものです。大した内容ではありませんので、暇つぶしに気楽にお読み下さい。

大川常雄が朝刊を読んでいると妻の良子が傍にやってきた。時間は十一時を十五分ほど過ぎた頃だ。こんな時間に朝刊などを読んでいるということは、さては寝坊をしたのだと思われそうだが、そうではない。

今日は土曜日である。すなわち仕事が休みの日ではあるのだが、常雄はそれでもいつもの朝と変わらぬ時間に起床した。若い頃は休日というと昼前までベッドで惰眠を貪っていたものだが、四十五歳という年齢になってからは、とんと眠りが浅くなった。体の老化も最近はそのスピードを少し加速したようで、ずっと体を横たえていと腰が痛くなるから、嫌でも体を起こしたくなるのだ。

少しフラフラする体を無理やり起こし、一階の居間へと足をヨロヨロと進めると、階段の手前で娘の恵美が部屋からあわてて飛び出してきたものだから、思わず仰け反りそうになった。

「休みなのに学校か？」

「部活。練習試合」

自分には一瞥もくれず、そっけなくそう言ってドタバタと階段を降りていく娘の姿を、まだはつきりと開いていない細い目で見送った。「行ってきます」という大きな声が玄関に響き、ボタンというドアが閉まる大きな音がすると、やけに静かになった。若いということ、それだけでいい。俺ももう一度高校生くらいに戻りたいもんだ。

髭を剃り顔を洗い、朝食を摂った。その間、妻の良子は洗濯機に洗濯物を放り込んでスイッチを入れると、食卓に座りそのまま朝刊に目を通していた。平日・休日に関わらず、これがいつもの大川家の朝の光景である。

「散歩に行ってくる」

朝食を摂り終わると常雄はそう言っ て飼犬を散歩に連れ出した。飼犬はラブラドル・レトリバーという大型犬である。この家を三十五年ローンで購入した際、親戚から犬を飼わないかと持ちかけられ、常雄自身はその気はなかったのだが、親戚が飼っていた犬が仔犬を産み、それを見せられるとそのあまりのかわいさに妻と娘の心が驚づかみにされてしまった。常雄自身も妻や娘ほどではないにしろ、せつかく一戸建てを購入したのだから飼ってもいいか、と思った。仔犬にあれほどはしゃいでいるのだ、面倒は妻や娘が見るだろうと思った。だが仔犬はあつという間に大きくなった。親犬を見てわかっていたはずなのに、その成長ぶりに妻や娘のお熱は冷め、以来飼犬の散歩という一番面倒くさい仕事は常雄の担当になってしまった。

休日の散歩であつても服はきちんとしたものを着なければならぬ。 「ならない」というと法律や何かでそう決まっていると思われるそうだが、そんな決まりなどこの世には存在しない。ジャージであろうがスエットであろうが着たいものを着て散歩に連れて行けば良い。常雄自身も本当のところはジャージにサンダルで散歩がしたいのだ。だがラブラドル・レトリバーに限らず洋犬というのは、不思議なことにそれだけで何かしら貴賓めいた雰囲気を持っている。飼い主といえども粗雑な格好をして散歩に連れ出すと、こっちがその下僕のようになってしまうのだ。何とも面倒くさいペットである。

飼犬の散歩を終えると掃除機がけた。いつもなら妻に言われて渋々手を出す常雄であつたが、今朝は梅雨の中休みの晴天が気持ちいい。だから珍しく自分から進んでやってやろうと思ったのだ。もちろんその後は床拭きだ。こんな気持ちのいい日にやらない手はないだろう。

本当は家事などをする父親になるつもりはなかった。だが、この家に引越してきた頃「とうとうマイホームを手に入れた」と思っ

たのがいけなかった。そう思うと自然と体が動き、気がつけば掃除をしている自分がいたのだ。そしていつの間にか、休日の掃除機がけはお父さん、という決まりが出来上がってしまった。

まったく、今となつては勘違いもいいところだつたと思つているが、できあがつてしまったシステムを変えるのは社会同様、家においても容易ではない。抗つたところでそれが覆ふことは、これに限らず一つもない。唯一「今日の床拭きはサービスである！」などと家族に吹聴するのが関の山だ。

一仕事終えた常雄が一息ついてふと時計を見ると、針が午前九時三十分を指そうとしていたから、以前から気にかけていたドラマの総集編を見るべく、あわててテレビのスイッチを入れた。そしてそれを一気見すると時刻は午前十一時になった。

さてこれからどうするか、と考えていると、妻から家庭菜園を見るよう促された。猫の額ほどの庭にほんの少しの枝豆とトマトとナスの苗を植えた「みすばらしい畑」と言つた方が正確な表現かもしれないが、それでもこれは常雄の夢の一つであつた。マンション暮らしをしていた際に、いつか一戸建てに住んだら家庭菜園を造つて野菜の自給自足を目指すぞ、と妻や娘に豪語していたのだ。だが今この様を見るたびに、何と遠大な計画であつたか、と少し恥ずかしくなる。本当はもうやめてしまいたいという気持ちがあるのだが、妻から「家庭菜園」と言われると皮肉を言われているような気がして、そんな時に限つて意地になつてしまうのだ。きっと自分は思つている以上に単純な性格なのだろう。

それぞれの苗の成長具合を観察すると、あまりの虫食いの多さに野菜苗用の殺虫剤を買いにホームセンターへ行かねばと常雄は思つた。そして妻に野菜苗の現状をあれこれ説明し、妻の「あら、そうなの」というあっさりした受け答えを頂戴した。

こうして常雄はやつと朝刊に目を通しだしたわけである。

土曜日の朝刊というのはいつもよりも量が多い。普通の朝刊に加

えて別紙の束が二つ付いてくるから、その分時間がかかるのだ。

読書が趣味である常雄にとって新聞を読むということも楽しみの一つであった。普段の朝は出勤の準備に忙しいからゆっくり目を通すことはできず、しかも家の新聞はあくまで「家の新聞」であつてそれを持ち出すことはできないから、駅の売店で自分用に新聞を買いなおして通勤電車の中で隅々まで読んでいた。それほど読むということに執着しているから、活字中毒と言つてもいいだろう。

今日は休日だ。しかも妻からの言いつけを含め、午前中にすべきことをすべてやり終えたのだ。だから何も気にすることなく新聞を読むことに埋没していた。そんな時に妻から訊かれたのだ。

「お父さん、昼ごはん何がいい？」

妻は涼しげな顔をして訊いてきたが、目の前の文章に入り込み、考えてもいなかったことを唐突に訊かれて何と答えればよいのだ。しかもまだ腹は空いていないのだ。そんな状況で昼飯のことを訊かれて答えに躊躇するのは自分だけではあるまい。世の父親族にとつて、これはもう詰問でしかないのではないだろうか。

「何でもいいけど」

少し考えてはみたが結局これと言つて食べたい物が浮かばなかったから、そう答えた。

「お腹、まだ大丈夫？」

「うん」

「じゃあ先にホームセンターに行く？」

「そうだな、そうするか」

本当はまだ新聞を読みたかったが、妻の提案を受け入れた。

それからそのまま二人で車に乗つてホームセンターへと出かけた。途中でガソリンランプが点灯したので、セルフのガソリンスタ

ンドに寄ると、メール会員になれば三円引きになるとその場にいた店員に言われ、即会員になった。何でもメール会員になると対象日にパスワードが記載されたメールが送られてきて、ガソリンを入れる前にそのパスワードを入れると更に安くなるというしくみだ。

こんな所にもＩＴ化の波は否応なしに押し寄せているのだな。情報を知っているのと知らないのでは大違いだ。格差社会が叫ばれて久しいが、これは紛れもないＩＴ格差であって間違いなくＩＴ貧民を作り出している。携帯電話が使えても携帯メールを使いこなせない親父が聞いたらさぞ悔しがって、この仕組みに対する批判のよきな持論を展開するのではないだろうか。

そんなことを考えながら常雄が車にガソリンを入れてみると、妻がすぐ傍にあるコンビニで何かを仕入れてきた。

「これが食べたかったのよね」

嬉しそうな顔をして妻がそう言いながらレジ袋の中身を見せた。

そこには「プレミアムロールケーキ」と書かれたケーキらしきものが二つ入っていた。もちろん何が「プレミアム」なのか常雄にはわからない。

「昼食後のデザートよ」

相変わらず妻の顔からは笑みがこぼれている。いくらしたのかは知らないが、それほど嬉しいものなのか、と常雄は妻に笑顔を返しつつ、そう思った。

「三つ買おうと思ったんだけど二つしかなかったわ。恵美には内緒ね」

娘はこのぎらつく太陽が輝く下で今頃部活に汗を流しているのだろう。しかしその頃彼女の父親と母親は涼しい家で昼食のデザートに「プレミアムロールケーキ」なるケーキを食べるのだ。そしてそのことを彼女は永遠に知ることがない。かわいそうだが仕方がない。ここは現場にいるものが勝つのだ。恨むのなら自分が入った「部活」というものを恨んでもらうしかない。

そう思うと娘が少し気の毒に思えたが、知ることがないのだから、

まあいいかと思いい直した。

それからホームセンターに行つて買物を済ませ、十二時半頃に帰宅すると、また妻が唐突に昼食のことを訊いてきた。

「冷凍のピラフか、溜まつているカップラーメンを処理するか、どれがいい？」

今度は両手に実物を持つてのプレゼンテーションである。

「どれにするか決めて！」

今度は明確な詰問である。

「どれでも……いい」

常雄は一頻り悩んだのだが、やはりどれでも良かったからそう答えた。しかし、妻はそんな常雄の答えを気にすることなくカップラーメンに印字されている賞味期限に注視し始めていた。

「残念！ 塩ラーメンも味噌ラーメンも三月で賞味期限が切れているわ。豚骨ラーメンも四月までだったわね」

そつだ、今はもう六月も半ばなのだ。

「もったいないけど捨てるしかないわね」

そつ言つと妻はおもむろに塩ラーメンの蓋を全て剥ぎ取り躊躇なく中身を捨てようとし始めた。

「待て！ 本当に食えないのか、そのカップラーメンは？」

常雄は咄嗟に妻に向かつてそう叫んだ。貧乏根性というのはこういう時には吃驚するくらい素早く出るものらしい。

「食べるの？」

妻が恐る恐る訊いてきた。その表情には、賞味期限が切れているのよ、という念押しが垣間見える。

さてこつという時に何と答えればよいものか。ここは今流行りの「エコ」だの「ロハス」だのという言葉織り交ぜれば少しは格好がつくのだろう。だが、天邪鬼な性格である自分は日頃からそついったものに懐疑心を持つているから、そんなお飾りのような言葉を巧みに使つた説明などできるはずがない。では単に「もったいない」

と答えればよいか。いや、それでは貧乏根性丸出しのように思われそうだ。それは夫としてあまりに不甲斐ない。

「あのさあ、最近のカップラーメンはノンフライ、つまりは油で揚げてないだろ。だから少しぐらい賞味期限が切れていても大丈夫じゃないのかな」

常雄は少し考えてから自信に満ちた表情でそう答えた。だがもちろんその答えには何も根拠はない。

妻はそれを聞いてもう一度手にしていたカップラーメンをしげしげと見た後、再び常雄の顔を見た。その表情は、本当にいいのね、とでも言いたげである。

ここまでできたら食わないわけにはいかん、と常雄は思った。根拠のない理屈に自分でも説得力がないと思ったが、他に自分の貧乏根性を覆い隠せるような洒落た台詞など思いつかなかったから、妻に向かつてそのまま無言で頷いた

「どれにする？」

「蓋を開けてしまったその塩ラーメンにしよう」

「じゃあ味噌ラーメンと豚骨ラーメンは捨てるね」

そう言われてまた貧乏根性に火が点いた。

「待て、捨てるのならそれも食べる！」

こうなれば貧乏根性ついでだ。塩ラーメンも味噌ラーメンも、更には豚骨ラーメンも、つまりはラーメンが大好きである自分にとって、塩は食べるが味噌と豚骨は食わんでは今回の事象に対する示しが見つからないではないか。

「あつそう。じゃあどれから食べる？」

そう訊かれてまた迷ってしまった。いくら貧乏根性ついでと言っても、さすがに一気に三食と言われると心が怯む。四十代後半をとくに過ぎている自分の胃腸は、「賞味期限切れ」という事実を許容できても、「三食」という量的事実を許容するのは不可能と思えたからだ。元から昼食にはそれほどの量を食べない自分に「三食」、しかもそれに「賞味期限切れというおまけ」が付いているものを受

け入れる余裕などあるはずがない。ここは無難に三食のうちから量的に許容可能な二食を選択し、自分の貧乏根性を納得させるのが良策であろう。

「とりあえず、蓋を開けてしまった塩ラーメンと、やはりその双壁を担う味噌ラーメンだな。豚骨は後回しにする」

「どっちから食べる？」

妻がまた難しいことを訊いてきた。あっさりとした塩ラーメンから食べるか、それともこってりとした味噌ラーメンから食べるか……。もし腹の具合が悪くなった場合、どちらの方が人体に及ぼす影響が少ないのか……。塩からにするか……。味噌からにするか……。どうするんだ、おい常雄。

天邪鬼だけではなく優柔不断な性格も顔を出した。いつもこうだから自分が嫌になる。

「面倒くさいから両方一気に作ってくれ！」

両目を瞑って一頻り考えた後、そう答えた。

「じゃあ私は8月まで賞味期限があるチキンラーメンにしようつと」
妻のその言葉を聞いて、常雄は瞑っていた両目を大きく開き小さく「エッ」と言った。

おいおい、そこは「じゃあ私は豚骨ラーメンを食べる」ではないのか。俺が賞味期限が数カ月過ぎたカップラーメンを一気に二食食べると言っているのだ。ならば妻であるお前は「残った豚骨ラーメンを食べる」と発言することが、今目の前で起こっている事実の展開に対するお約束事ではないのか。なあ、おい、それが夫婦というものではないのか。

常雄の胸にそんな思いが去来した。だがすぐに、いやそれは違うな、と思い直した。

よくよく考えれば、今夫婦揃って賞味期限切れのカップラーメンを食べて、最悪、夫婦揃って食あたりなどを起こしたらたまったものではないではないか。例えば夫婦揃って腹を下し、一階と二階の便所におのおのが籠るような状態になってしまふことなど想像した

くもない。ここは片方が異常かもしれない物を食べようとしている以上、残されたもう片方は正常のものを食べるべきであり、かつ仮に異常かもしれない物を食べた方が地に伏せてしまった場合、それをやさしく介護すべきなのだ。そういう意味では妻の選択は正しい。それが実は「単に賞味期限切れのものなど食べたくない」というものであったとしても、大義名分として立つではないか。

常雄はそう思うことにした。

しばらくしてテーブルに二つのカップラーメンが運ばれてきた。今まで同じ種類のカップラーメンを二杯食らったことは幾度となく経験したが、種類の異なるカップラーメンを同時に食らうのは四十数年生きてきた人生の中で初めて経験することである。しかもそれが賞味期限切れのカップラーメンなのだから、考えようによつては貴重な体験であろう。だがきつと誰も好き好んでこのようなことはやるまい。

この場合もし後から食あたりの症状が発生したとしたらいったいどちらを疑うべきなのであろう、と常雄は思った。そしてそんなことを考えながらも、どちらから手をつけるべきか、否、どちらから口にすべきか大いに悩んだ。賞味期限切れではあるが、どちらのラーメンからも食欲をそそるいい匂いがするから尚更だ。まるでいい匂いを出して獲物をおびき寄せる食虫植物のようでもある。その様を見ていると頭の中で懐かしい童謡をもじった歌も流れ出した。

つー、つー、つーねお、来い。

こっちのラーメン、しーおだぞ。

こっちのラーメン、みーそだぞ。

つー、つー、つーねお、来い。

（これで腹でも下したら本当に食虫植物にやられた昆虫みたいだな）

そんなことを思いつつも、もうあれこれ考えるのが面倒くさくなつた常雄は「フーツ」と一つ深呼吸をすると目の前にあつた塩ラーメンから手をつけた。躊躇することなく箸で麺を掴んで口元に運び「ズズズ」という音を立てて勢いよく口の中へ流し込む。何度か咀嚼し麺を確かめたが問題はない。次にスープを口に含んでみたがこれも問題ない。いたっていつもの塩ラーメンである。

「全然問題ないよ！ 十分食える！」

「そう。良かったね」

妻は特に興味がないらしく、テレビを見ながら黙々と自分のチキンラーメンとブドウパンを食べながらそう答えた。

常雄は、そのまま味噌ラーメンにも手をつけた。これも麺、スープ共に問題はない。

「この味噌ラーメンも全然大丈夫！ うまいうまい！」

「ふーん」

やはり妻はそれほど興味がないようであつた。

こうして常雄は、一口二口塩ラーメンを食べては、次に味噌ラーメンを一口二口食べ、また次に塩ラーメン、という具合に両方を交互に口にした。そしてスープをも含めて両方を完食した。

「ごちそうさまでした。賞味期限切れと言うものの、やっぱり大丈夫だったよ」

そうは言つたものの、賞味期限云々以前にやはり塩ラーメンと味噌ラーメンは同時に食べるものではないと思つた。それぞれは確かにうまいのだが、それが同じ胃袋に入るとなると少なからず不協和音が発生するようだ。

「後からお腹痛いと言わないでよね」

相変わらずチキンラーメンとブドウパンを食べながらテレビを見ている妻が常雄を一瞥してそう言つた。

「大丈夫！ 匂いも味もいつもと全然変らなかつたから」

そう答えながらも、胃の中の不協和音が顕在化しつつあると常雄

は感じた。

「そう、じゃあ豚骨ラーメンも置いておくから食べてよね」

妻は常雄に面と向かってさりとそう言った。

（えっ、豚骨ラーメンも俺が食うのか！）

そう思っや否や常雄は激しい胸焼けを感じたから、それを解消するために一つ思い切り息を飲み込んだ。するとそれを押し返すかのように胃から大きなゲップが出そうになったから、思わず「ゲエーップウー」大きな声を発しながらそれを思いきり出した。

すぐに妻からの視線を感じた。しかめっ面をしてこっちを睨んでいるのがよくわかったから少し恥ずかしくなった。

常雄はすぐにテーブルの上に置いていた新聞を手に取り、妻の視線を遮るようにそれを大きく開いた。

「じゃあ、デザートの『プレミアムロールケーキ』を食べましょうか」

妻のその一言に常雄は思わず目を窓の外に移した。そこには飼犬のラブラドル・レトリバーがいて、不思議な面持ちで常雄を見つめていた。

（了）

（後書き）

ご感想等いただけましたら幸いです。
なおブログは、

<http://blog.murablo.jp/victory/>

です。基本、毎日何かしらの文章をアップしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1493u/>

賞味期限切れに鎮魂歌（レクイエム）を

2011年6月23日00時40分発行